

平成21年11月5日

12 英語受験の神様

佐川 春水 島根県出身 東高師36卒
在職36~39 島根大

最近においても、「受験の神様」と呼ばれる予備校の有名講師はたくさんいるようですが、戦前において、まさに「英語受験の神様」と自他共に称されるのは、佐川春水です。

佐川は、東高師を卒業するとすぐに附属中学の教官になりましたが、わずか3年で辞めて、正則英語学校に移りました。佐川が、正則学校に移った理由は、同郷で松江中以来の友人であった山田巖がおり、その誘いのためであったようです。附属時代の佐川の授業はよくわかりませんが、正則学校時代には、次のようであったと、当時の教え子の1人はその様子を述べています。

「そのころおそろしく掛け持ちでない学校直属の先生の1人として、生徒たちの人气的であったのが佐川春水先生であった。実に水際立った美男子で、役者にもこんな素顔の美しい人は一寸あるまいと、子ども心にも感じられた程の眉目秀麗の先生であった。・・・そして、その弁舌たるや、実に歯切れがよく爽やかで、常に微笑を湛え、時々ウィットをまじえて生徒をドツと笑わせた。緩急自在で、当時正則の佐川春水と喧伝されたのも当然であった。容姿のスマートさ、ハイカラさ、発音の日本人離れのした英語・・・」

そして、正則時代には、学校で教えるとともに、イギリスの有名な作家・コナン・ドイルの「シャーロック・ホームズ」のシリーズを翻訳したりもしています。ただ、ホームズは「本間」、ワトソンは「綿貫」という名前で登場させています。この翻訳本は売れ行きもよく、訳註物のハシリにもなりました。さらに、明治41年には、雑誌「英語の日本」を創刊・編集にあたり、英語教育の諸問題を論じるようになりました。

ところが、大正8年、正則の校長であった斎藤秀三郎と何かで対立したらしく、正則を辞め、翌年、独立して日進英語学校という、今で言えば英語予備校を開きました。日進は純然たる英語だけの学校でしたが、

佐川の経営手腕と講師陣にも優秀なスタッフをそろえていたためか、一時生徒数が4000人を超えるほどの繁盛振りでした。さらに、大正14年には、佐川が始まったばかりのNHKのラジオ「英語講座」にも出て、以前にも増して「英語受験の神様」と称されるようになりました。

日進は、昭和19年、戦争などの影響により廃校となるとともに、空襲でも焼失し、佐川は、郷里島根に帰りますが、島根大学の専任講師をしながら、好きな俳句・絵画・書道などを嗜みながら悠々自適の生活を送りました。息子の佐川洋によれば、「松江時代の父は、英語の教師というよりもむしろ「俳句の宗匠」だった。」といわれるくらいに俳句に凝り、松江放送局の「ラジオ俳壇」に、その開設から廃止まで出ていたといわれるくらいです。

ところで、附属中学校の校長室には、「春水」と署名のある「梅に鳥」のすばらしい掛け軸の絵があります。附属中学校の関係者で、「春水」という号、あるいは名前のものは佐川しかいませんから、その絵は佐川がいつか描いて附属中に置いていったに違いありません。附属中の宝の一つです。

『英語青年20巻3号』佐川春水追憶昭和43年



附属中学校校長室にある佐川春水の絵と思われるもの。「春水」の署名があります。雑誌は、

昭和7年発行された東京文理・高等師範・附属の英語教官による卒業生ための雑誌

13 最初の英語教育専門誌

渡邊半次郎 千葉県出身 東高師38卒

在職38~41 東高師教授

日本において、明治17年に出た『洋学独案内誌』というものが英語学習雑誌のはじめのもののようです。しかし、翌年、『英文学生学術雑誌』が創刊され、広告以外はすべて英文で、日本語もローマ字で綴られ、これを英語雑誌の嚆矢という人もいます。その後、英語の雑誌は、『日本英学新誌』（明治25）、そして、明治30年代からは乱立ぎみで、明治の末までには、合計で60誌程度になるようです。

それらの中で、最初の英語教育専門誌として発行されたのが、『英語教授』で、明治39年、編集主任は広島高等師範にいたP・A・スミス、そして、これに協力していたのが、渡辺半次郎でした。全文英文で、年三回（後に、5回）の発行でした。もちろん、英語教育の雑誌ですから、今までに上げた附属中の教官やこれから記していく教官も後にこの雑誌の編集、論考に加わっています。例えば、片山寛「単語の教授について」、篠田錦策「英習字の教授について」、そして、渡辺には「津田梅子女史訪問記」などがあります。そして、この渡辺の記した津田梅子も編集に参加しています。この雑誌が発行されたのは、明治39年で、渡辺は東高師を38年に卒業し、すぐに附属中の教官になりましたので、まさに教官時代にこの雑誌の発刊にたずさわった人物といえることができます。しかし、彼は、自分の勉強不足を感じたのか、東京帝大に入学をしながら、教官を辞めました。そして、大正12年、東高師教授になり、昭和20年まで勤めました。

ところで、佐川春水が編集していた『英語の日本』は、渡辺らの2年後に発行されますが、最後の2年間の編集は、専ら西条八十が行ないました。西条八十は、戦後の流行歌の大作家で、著名な流行歌はほとんど彼がつくっているといっても良いほどです。